

書評

●書評

『民間念仏信仰の研究』

『文化人類学と現代民俗学』

『女講中の民俗誌―札幌半島における女性同士のつながり―』

『みんな戦争―戦後美談と動員のフクロクローア―』

坂本要 著

民間念仏信仰の研究

書評

西海賢二

A5判/841ページ
本体価格：17,000円＋税
2019年10月刊
法蔵館

はじめに

著者の坂本さんに初めてお会いしたのは1974年のことであるから、もう46年も前のことになる。坂本さんが主催していた「仏教民俗研究会」に参加したのがきっかけであった。その時、すでに「念仏の坂本」と会員の方から羨望の目で見られていたことを鮮明に覚えている。仏教民俗研究会は1973年11月に廃學を間近にしていた東京教育大学文学部史學方法論教室で発足した。1975年には、雑誌『仏教民俗研究』が創刊され、以後第七号まで発行していた。その後、研究会は休会を挟み断続的に166回の研究会を開催し、2008年に名称のみを残し活動を停止している。

さて「仏教民俗研究会」の30有余年の歩みは、1950年代

以降の京都の大谷大学五来重氏を中心とした「仏教民俗」「仏教民俗学」東京の大正大学星野俊英らを中心とした仏教民俗学会設立という研究動向を視野におきながら、関東地方の20、30代の若手研究者集団が参集しており、当時の民俗学の潮流であった沖縄研究、比較民俗学、都市民俗学、映像民俗学、個別分析法なども積極的に交流を結んだことはその後の民俗学研究に影響を与えたことは言うまでもない。それは坂本さんが埼玉大学で文化人類学を友枝啓泰、長島信弘両氏及び同窓生の渡辺欣雄、小松和彦両氏の薫陶を受けたこと、さらには東京教育大学大学院で宮田登氏から民俗学を学び、この二つの学問的世界を混合しながら、50年間の調査を継続され今回まとめられ、まさに大著として実らせたことに賛辞を送りたい。

正直なところ、1970年代の半ばから2019年まで71本の念仏信仰の論文を上梓していながら、さらにはすでに1994年の某出版社のシリーズ7冊目として出版広告に「民間念仏の民俗研究」とあったのを見出してからなんと四半世紀の時が流れている。この理由がこの大著の刊行で氷解した。すでに宮田登先生が亡くなる(2000年)頃には原稿の構成は粗々完成していたと思われる。ところが徹底した調査が進めば進むほ

ど、まだまだの研究態度が許されなかったであろう。

この間の経緯は、1995年頃から職場が高等学校(定時制)教諭から大学に身を置くようになった事がいきよい調査が拡大したのであるか、さらに驚くことが60代になってからの調査は傍目で見ているだけでも驚嘆するもので、かつ2010年代の10年間で39本の論文を作成しており驚きを覚える。それほど時間をかけた著作だから800頁を超える、出版社の宣伝に重量1、2キロと掲示されており、質量ともに大著の刊行を一個人としてより、研究会で指導を受けた先輩として歳はとつても学びたいものである。

民俗学そして仏教民俗学へ

さて、これから坂本さんの「民俗」に対するアプローチ、スタンスについて少し触れておきたい。記憶が定かではないがもう10年以上前のある雑誌インタビューにこんなコメントを寄せていたと思う。「民俗」とは語意からすると「民間の習俗」ということだろうか、メディア論から見ると、直接コミュニケーションに基づくアンチメディアの世界で成り立っている文化と言えるでしょう。文字を媒介としない「声」や「そぶり」で伝達する社会、それが記憶として世代を超えて伝えられている。そのような文化の体系を「民俗」と定義しておきたい。社会に文字があっても、そうでない部分「文字文化の中の非文字文化」と捉えればいいのです。続けて「念仏は一種の呼吸法に基づい

ている」と下りが妙に坂本さんのあの超人的な調査活動の引き金になっているのだと再確認した次第であり、その最適な題材が「民間念仏」であったのであろう。

民間念仏とは、民間の人々、在家の人々が主になって行なう念仏で、その典型として盆行事に代表される念仏芸能や念仏講として今日でも全国各地で広く行われている。これらの念仏をめぐる行事は坂本さんの半世紀にわたる調査中にも少なからず消滅していったことを本書の随所に見いだすことができる。それでも調査の結果、歴史的には融通念仏・六斎念仏・大念仏・双盤念仏・念仏踊りなどとして現在に至っている報告を提示してくれている。

民間念仏がはじめて全国的規模でかつ網羅的にまとめられたのは1966年(昭和41)に仏教大学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究 資料編』(隆文館)であるが、この著書が刊行される前後から坂本さんの念仏を中心とした調査が開始されたことが予想される。前掲書は五来重、星野俊英らの仏教民俗学への接近も認められるが、視点が少なからず異なっていたそれは宗門(教団)という枠組みを背景としており調査方法がアンケートを中心に据えたものであったのに比べて、本書は坂本さんの足、眼、耳で確認した実地調査であり、さらに民俗映像化を行ったものでまさに民俗学者の本格的な「民間念仏信仰の研究」の嚆矢であろう。

半世紀にわたる調査地は全国各地600ヶ所以上に及ぶ、そ

して文化人類学的な素養と民俗調査の積み重ねによって、これまでの民間念仏の盲点であった歴史的経緯を解明するとともに、民間念仏という習俗を越えて「民間念仏論」の集大成として、民間念仏研究をするときのバイブル的な著作として長く活用されることであろう。やや冗長した紹介に終始したのは書評を依頼された時に本書を資料集として読むのか民間念仏論集として読むのか正直困惑した経緯を認めざるを得ない。これは現在の出版状況ではないものなかりであるが、出来れば資料編と論集による二分冊、あわよくば映像編をも独立させた三分冊が可能になればと思うのは私だけであろうか。よって余りにも大部なので各章毎の紹介及びコメントを控えて全体的な流れの中で後続に続く者としてこうした資料の活用や隣接学問との協力を図ってみたい。全体構成は以下の通りである。

第一章 民間念仏の系譜

第一節 民間念仏の系譜

- 1 念仏とは
- 2 民間念仏の定義
- 3 百万遍念仏
- 4 六斎念仏
- 5 双盤念仏
- 6 念仏踊り
- 7 傘ブクと盆踊り

(54頁)

第二節 踊り念仏の種々相

- 1 空也および空也系の踊り念仏
 - 2 導御と融通念仏
 - 3 一向と一向衆
 - 4 一遍と他阿
 - 5 小結
- 第二章 融通念仏と講仏教
- 第一節 融通念仏と大念仏
- 1 融通念仏と講仏教
 - 2 大念仏と融通念仏
- 第二節 知多半島の虫供養大念仏と講仏教
- 1 愛知県知多半島の念仏行事
 - 2 大野谷の虫供養
 - 3 阿久比の虫供養
 - 4 東海岸の虫供養
 - 5 西海岸の虫供養
 - 6 全体をとおして
 - 7 虫供養大念仏の成立と変遷
- 第三章 六斎念仏の地方伝播
- 第一節 全国の六斎念仏
- 第二節 奈良県の六斎念仏
- 第三節 若狭の六斎と念仏概要

(97頁)

(72頁)

- 2 高浜町
 - 3 おおい町(旧大飯町)
 - 4 小浜市(旧名田庄村)
 - 5 小浜市西部
 - 6 小浜市東部
 - 7 若狭町(旧上中町)
 - 8 若狭町(旧三方町)
 - 9 小結
- 第四節 平戸・杵岐の六斎念仏
- 1 的山大島
 - 2 度島
 - 3 佐世保市鹿町町の里供養平
 - 4 小値賀島前方後目
 - 5 杵岐島
 - 6 小結
- 第五節 富士山周辺の祈禱六斎念仏
- 1 概説
 - 2 早川町
 - 3 富士河口湖町本栖
 - 4 身延町下部湯之奥
 - 5 甲府市右左口町周辺
 - 6 南アルプス市吉田
 - 7 甲府市大里町窪中島

- 8 甲府市上黒平
 - 9 山中湖村平野
 - 10 上野原市無生野
 - 11 山北町世附
 - 12 御殿場市市川柳
 - 13 富士宮市内野・足形
 - 14 富士市鍵穴
 - 15 小結
- 第四章 双盤念仏―芸能化された声明
- 第一節 双盤念仏の概要
- 1 双盤念仏とは
 - 2 研究史
 - 3 分布
 - 4 形態分類
- 第二節 神奈川県の大盤念仏(付 千葉県)
- 1 鎌倉光明寺
 - 2 三浦半島
 - 3 横浜市
 - 4 川崎市
 - 5 県央・県西地区
 - 6 千葉県
- 第三節 東京都の大盤念仏
- 1 増上寺 港区芝 宝珠寺 港区赤羽橋

(280頁)

- 2 今泉延命寺 大田区
- 3 九品仏浄真寺 世田谷区奥沢
- 4 慶元寺 世田谷区喜多見
- 5 本願寺 府中市白糸台車返し
- 6 玉泉寺 あきる野市二宮
- 7 西徳寺 日の出町大久野
- 8 宿の薬師 武蔵村山市三ツ木
- 9 乗願寺 青梅市勝沼町
- 10 勝楽寺 町田市原町田
- 11 大善寺 八王子市大横町
- 12 都内南部の寺
- 第四節 埼玉県の双盤念仏
 - 1 入間市官寺西久保観音堂の鉦張り
 - 2 入間市の双盤念仏
 - 3 入間市近辺の双盤念仏とその系譜
 - 4 飯能市のダンキ(双盤念仏)
 - 5 浅草寺奥山念仏堂
- 第五節 関西の双盤念仏(付 岡山県・鳥取県)
 - 1 楷定念仏
 - 2 滋賀県湖南・滋賀県甲賀・三重県伊賀
 - 3 京都府
 - 4 奈良県
 - 5 大阪府
- 6 和歌山県
- 7 兵庫県
- 8 岡山県・鳥取県
- 第六節 善光寺と名越派の双盤念仏
 - 1 善光寺
 - 2 甲斐善光寺・元善光寺・跡部西方寺
 - 3 浄土宗名越派
 - 4 九州の双盤念仏
 - 5 善光寺系双盤念仏の位置付け
- 第七節 双盤念仏の成立と変遷
 - 1 京都真如堂と鎌倉光明寺の十夜法要
 - 2 関西の双盤念仏から
 - 3 念仏と鉦の変遷
- 第八節 双盤念仏資料
 - 1 双盤念仏一覧
 - 2 双盤鉦・雲版の古鉦
 - 3 双盤念仏・雲版の構成一覧
- 第五章 大念仏と風流踊り―念仏踊りの二部構成(170頁)
 - 第一節 三遠信国境地区と周辺の大念仏芸能の概観
 - 1 東栄町の分布と構成
 - 2 三遠信地区の分布と構成
 - 3 東海地方の分布と構成
 - 第二節 南信州の念仏踊り・掛け踊り

- 1 和合の念仏踊り
- 2 日吉の念仏踊り
- 3 坂部の掛け踊り
- 4 下栗の掛け踊り
- 5 大河内の掛け踊り
- 6 向方の掛け踊り
- 7 梨久保の樽木踊り
- 8 温田の樽木踊り
- 9 平岡満島神社のお練り
- 10 中井侍の湯立て祭りのお練り
- 11 日吉のお鍛祭り
- 12 売木村のお練り
- 13 新野の盆踊り
- 14 念仏系と風流系
- 15 小結
- 第三節 水窪大念仏と五方念仏
 - 1 地区の概況
 - 2 西浦の大念仏
 - 3 各地区の大念仏
 - 4 小結
- 第四節 三遠信大念仏の構成と所作―三河地区を中心に―
 - 1 分布概要
 - 2 三河地区のハネコミと念仏踊り
- 3 大念仏の構成要素
- 4 小結
- 第五節 奈良県十津川村の大踊りから見た盆風流
 - 1 十津川の盆踊り・お踊り
 - 2 盆踊り・大踊りの構成
 - 3 三遠信大念仏との比較
- 第六章 傘ブクと吊り下げ物
 - 第一節 伊勢・志摩大念仏と傘ブク
 - 1 伊勢・志摩大念仏の行事
 - 2 伊勢・志摩大念仏の構成
 - 3 鳥羽市加茂五郷の大念仏
 - 4 小結
 - 第二節 傘ブクと葬送儀礼
 - 1 風流傘と傘ブク
 - 2 盆行事と傘ブク
 - 3 傘ブクと吊り下げ物
 - 4 小正月の傘ブク
 - 5 祭礼図・洛中洛外図にみる吊り下げ物
 - 6 傘ブクと送魂儀礼
- 第七章 まとめ
 - 1 踊り念仏と念仏踊り
 - 2 融通念仏と双盤念仏
 - 3 日本的念仏と民俗

初出論文一覧

参考文献

坂本要念仏関連論文著作

あとがき

図版一覧

調査地一覧

ポリウムからみれば、圧倒的に第四章、第五章、第三章で全体の70%を占めているが、この部分は資料集であり他の30%が論集になるであろうか、本来70%を紹介するのが筋であろうがここでは第一章、第二章、第七章の論集部分について若干のコメントを付加させていただく、一章を紹介する前に研究史を含めた坂本さんの「仏教と民俗―実態へのアプローチ」を踏まえ「民俗」の中の「仏教」、あるいは「仏教」の中の「民俗」というかけあいの実情という視界に注視しながら「仏教」と「民俗」を連携させる接点としての「民間念仏」にいたる経緯を考えてみよう。

坂本さんは1986年10月の仏教民俗研究会105回例会において「柳田國男以前の仏教民俗」という報告をされ、同月の『歴史手帖』No.14-10に「日本的仏教と仏教民俗」(名著出版)を上梓している。ここで仏教民俗の定義をしている。この論は1980年代までの日本宗教や日本仏教に関する理論的枠組みをした上で、日本的仏教もしくは仏教民俗に混交宗教論を援用したもので中牧弘充氏の『神々の相克』(1982年 新泉社)

るきつかけとなり、本書の刊行となったのではなからうか。

以下、各章ごとの概略を紹介する。

第一章「民間念仏の系譜」では、民間念仏の古代・中世を系譜的に百万遍念仏・六斎念仏・双盤念仏踊り・傘ブクと盆踊りを概括し、踊り念仏という空也系・一遍系の僧侶が関与する念仏の種々相を紹介している。

第二章「融通念仏と講仏教」では、融通念仏と大念仏の概括をして、知多半島の虫供養大念仏と講仏教の調査資料を提示しながら、融通念仏との関係を論じている。

第三章「六斎念仏の地方伝播」では、十五世紀に遡源があるとされる高野山ではじまったとされる六斎念仏の概括をして、若狭地方・平戸・壱岐・富士山周辺の祈禱六斎念仏がキリシタン・修験道儀礼との神仏習合的要素のあった事例を数多く紹介している。

第四章「双盤念仏―芸能化された声明」では、これまで紹介されなかった双盤念仏の研究史を紹介するとともに、とくに浄土宗系の双盤念仏を神奈川県・千葉県・東京都・埼玉県・関西地方・山梨県・長野県の300ヶ所の調査事例を紹介し、双盤念仏の成立から変遷そして民間に伝播していった事例を、とくに民俗芸能化する視点から概括している。

第五章「大念仏と風流踊り―念仏踊りの二部構成」では三遠信国境地区と奈良県の多くの念仏芸能としての念仏踊り、掛け踊り、五方念仏、大踊りの調査記録をもとに風流系念仏踊り

「土着主義的宗教論」によっているとしている。要約すれば、仏教はインドで発生し、中国・朝鮮を経由して日本に流入した外来宗教であり、これは歴史的に見ても疑いようがない。一方この仏教流入以前のなんらかの宗教、明確な組織や体系をもつてものでない宗教もしくは信仰があったことも確かである。柳田國男はそれを「固有信仰」というが、それが固有であるのかどうか、また固有とは何を指すのか不明確であるとしている。

その前提に仏教とそれ以前からある宗教の混交によって、日本宗教はなりたっている。それを坂本さんは仏教流入以前の宗教の二つの円がぶつかり合い、一部重なりあうという図を描くことができる。重なった部分が日本的宗教ということになる。これを仏教と民俗という二つの円で考えてみると重なった部分が仏教民俗と民俗になる可能性、すなわち「民間念仏」の中に導き出そうとしたのが本書の基礎になり、その結果が600ヶ所にも及ぶ点としての民間念仏を集大成することになったのであろうか。これは資料編の数多の事例をみれば納得せざるを得ないであろう。

このあたりのことは2007年10月6日の日本民俗学会公開シンポジウム「仏教と民俗」の基調講演をされた豊島修「仏教と民俗の交渉」のなかでも五来重氏の「仏教と民俗」(『日本民俗学大系』8所収)を基礎としつつ坂本要氏が提示した「日本的仏教と仏教民俗」のなかに見いだす可能性があるとの紹介もあり、この2007年から2018年迄の驚愕の調査をすすめる

は念仏と風流踊りに分けられることをその構成要素から論じている。

第六章「傘ブクと吊り下げ物」では、三重県伊勢・志摩地区の大念仏に特徴的に見られる傘ブクを取り上げ、送魂儀礼の実態に迫っている。

第七章「まとめ」では「踊り念仏と念仏踊り」と「融通念仏と双盤念仏」から得た資料から坂本氏の前掲した「日本的念仏と民俗」の本質を詳細に論じている。

以下は、日本の仏教民俗学を牽引してきた五来重門下生の見た「仏教民俗学」と筆者の仏教民俗学の方向性から、坂本さんの提示した「仏教民俗学としての民間念仏」の進展を考えてみよう。

二十一世紀直前の二〇〇〇年二月一九日に「民俗宗教・民俗芸能シンポジウム」という大きなテーマのもと、これまでの研究成果を振り返り、今後の研究の方向性を展望するような研究集会(主催・宗教史研究会)が開催された。この時五来重氏の集大成的な報告をしたのが木場明志さんであった。木場氏の「五来宗教民俗学が教えたもの―民俗宗教・民俗芸能シンポジウムによせて―」は五来重氏の問題関心の変遷を、以下の九点に集約している。

- (1) 仏教と民俗の必要性を解明した。
- (2) 仏教年中行事の民俗性を解明した。
- (3) 葬送習俗の基礎文化を解明した。

- (4) 仏教芸能の民間伝播の系譜を解明した。
 (5) 民間仏教を支えた聖を解明した。
 (6) 修験道研究の基層信仰の多様の表出事例としての有効性を解明した。
 (7) 仏教伝承研究のテキストとしての有効性を指摘した。
 (8) 日本宗教民俗学の提唱。
 (9) 修験道巡礼を通じた海洋信仰の研究の可能性を提唱
 この提示のなかで、本書の研究では(1)・(2)・(3)・(4)・(7)・(8)はほぼ五来氏の提示以上の方向性を見いだしている。それに対して(5)・(6)・(9)はやや等閑になった点がぬぐえない。
 筆者は、あくまでもないものねだり、かつ要望を以下に掲示する。
- (1) 民間念仏の伝播に関わった念仏聖などの宗教的職能者の介在を評価する必要がある。
 (2) 全国におそらく数十万を超えるであろう、「念仏供養塔」の地域的分布を提示する。
 (3) 念仏芸能の衰退を主に地域の限界性に求める(これは民俗学者・民俗芸能学者にも共通性がある)だけでなく、時代性や強制的に「民間念仏」に対する弾圧が行われていたことに留意する必要がある。
 (4) 民間念仏(講仏教)に集約するだけでなく地域社会の念仏講の組織に注意する必要がある。

- 小野澤真「『中世時衆史の研究』その後」牛山佳幸書評を拝読して「『寺社と民衆』11号 民衆宗教史研究会 2015年五来重「踊り念仏」平凡社 1988年
 菅根幸裕「近世鉢叩の形成と展開」常陸国六倉空也堂と空也聖——『千葉経済論叢』四八号 千葉経済大学 2013年
 圭室文雄「江戸幕府の宗教統制」評論社 1971年
 仏教大学民間念仏研究会編『民間念仏の研究 資料編』隆文館 1966年
 西海賢二「近世の遊行聖と木食観正」吉川弘文館 2007年
 西海賢二「念仏行者と地域社会——民衆の中の徳本上人——」大河書房 2008年
 西海賢二「五来重先生の仏教と民俗から仏教民俗学へ」『宗教民俗研究』第29号 日本宗教民俗学会 2019年
 根井浄「補陀洛渡海史」法藏館 2001年
 柳田國男「毛坊主考」『定本柳田國男集第九卷』筑摩書房 1969年
 金井清光「中世芸能と仏教」新典社 1991年
 坂本要「仏教民俗研究会」前後「『仏教経済研究』48号 駒澤大学仏教経済研究所 2019年

- (5) 是非とも索引が欲しい。
 (6) 民間念仏の組織母胎に若者組などの関与が大であることに注意する必要がある。
 (7) 地方文書のなかに大量の念仏集が多く確認されるので集約する必要がある。
 (8) 調査地一覧の340から373は静岡県ではなく、愛知県である。
 (9) 参考文献、小野沢真一は小野澤真である。同中尾堯一 二五七は一九五七
 以上は、ほとんど評者にも問われることでもあるので今後の収集と情報交換に努めたい。
 余りにも、大著であり紙幅の関係で書評とならず、坂本さんの回想録になってしまったことをお詫びする。それにしても、昭和45年以来的の日記をあらためて見る機会があったがそれによると調査先で坂本さんと遭遇した場所が福島県・埼玉県・千葉県・茨城県・東京都・神奈川県・山梨県・静岡県・長野県・愛知県・三重県などであった。いつも定番のように背後から「すつ」と来て「やあ」と言葉を残して調査に明け暮れる姿に、少なくなつた調査する民俗学者に頭がさがる。妄言多謝。

参考文献

- 大森恵子『念仏芸能と御霊信仰』名著出版 1992年
 小野澤真『中世時衆史の研究』八木書店 2012年

書 評

桑山敬己・島村恭則・鈴木慎一郎 著
 文化人類学と現代民俗学

岩本通弥

A5判/100ページ
 本体価格：900円+税
 2019年4月刊
 風響社

本書は「関西学院大学現代民俗学・文化人類学リブレットの第一弾として刊行されたブックレットの一冊である。構成は、第一章の桑山敬己による「文化人類学」と、第二章の島村恭則による「現代民俗学」をつなぐ形で、七頁のコラム・鈴木慎一郎の「カルチュラル・スタディーズ」が挿入されている。島村の結論に相当するまとめの言葉によれば、三者は「一定の自律性を持つて成立」するとともに、「生産的な相互補完関係」にあつて、「二つの学問領域を同時に学」ぶことによって、「人間と文化についての複眼的な視野を獲得することが可能になる」のだとする。オムニバス授業のテキストであろうことは容易に想像されるが、わずかに百ページの小冊子であるにも拘らず、『日本民俗学』誌上に、複数の執筆者による論集が書評として掲載されることは、かなり異例である。書誌紹介ではないかと再度、編集担当理事に問い合わせてみたところ、書評に違いないとのことで、本評もその意向に沿った変則的なものになるうことを、あらかじめ断っておきたい。